

呬字の字相について

序

空海は多くの著作をあらわしているが、古来から『即身成仏義』・『声字実相義』・『呬字義』の三書を『三部書』と称し、真言密教の思想そのものの特質を明確に示したものである。今回この中の『呬字義』をとりあげ、その字相面の意義内容を明らかにしてみたいと思う。

『呬字義』一卷は漢字でもってすると、五二〇〇字弱の比較的短編な書物である。この呬(hin)字は、サンスクリット語の最後の文字であり、また、初めの文字が阿(ə)となっている。この阿呬の両文字が、密教ではあらゆる面で重要な位置を示しているのである。しかし、この呬字なる一字真言の意義等を解釈したのが『呬字義』なのである。この阿呬等の一字真言を始め、多くの真言陀羅尼はどのような意味をもっているのかについて、『御請来目録』⁽³⁾には、
真言は幽邃にして、字字、義深し。

と示され、『声字実相義』には、
よく諸法の実相を呼んで不謬・不妄なるが故に真言と名づく。その

眞柴弘宗

真言いかんが諸法の名を呼ぶや。真言無量に差別ありというといえども、かの根源を極むるに大日尊の海印三昧王の真言に出でず。かの真言王いかん。金剛頂および大日経所説の字輪字母等これなり。かの字母とは梵書の阿字等乃至阿字等これなり。この阿字等はすなわち法身如来の一一の名字密号なり。⁽⁴⁾

とあり、また、『般若心経秘鍵』には、

真言は不思議なり、観誦すれば無明を除く、一字に千理を含み、即身に法如を証す。⁽⁵⁾

と示されている。このように、これらの文は真言とは何かを説明したものであろう。この真言の中で、一字真言たる呬字をより一層深く解明したのが、この『呬字義』ということである。

一 呬字の字相・字義

『呬字義』に説かれているものは、呬の一字を字相と字義の両面からである。字相とは顯教的な浅略の解釈、つまり言語の表面的な意味を指すものであり、字義は密教の深秘の解釈により、字相のもつてい

る意味をより深く追求し、密教独特の実義を示しているのである。

『梵網經開題』に、

大日経に准するに、一切経にかならず二種の義を具す。いわく浅略と深秘となり。浅略はすなわち多名句をもってその義を顯わす。深秘は一一の字字に無量の義を具す。また字相はすなわち頭、字義はすなわち秘なり。⁽⁶⁾

とあり、字相と字義について説明されている。そこで、『吽字義』のことについて字相段では、漢字でいうと三一九字あまりで説かれ、字義を解釈するところの別積段で三三〇四字、合積段で一五七一字をもって示されている。したがって、字相段においては、浅略の義であるから分量が極端に少なく、重要な字義に重点をおいていることがわかるのである。

二 吽字の字相

(一) 訶字の字相

そこで、吽字の字相を解釈すると、『吽字義』には、初に字相を解すとは、また四に分つ。四字分離の故に。金剛頂⁽⁷⁾にこの一字を積するに四字の義を具す。一には賀字の義、二には阿字の義、三には汗字の義、四には麼字の義なり。⁽⁸⁾

と示されているように、この吽(hūm)の一字は訶(ha)・阿(a)・汗(u)・麼(ma)の四字からなるものである。この件については『般若理趣積⁽⁹⁾』から引用し、訶字・阿字・汗字・麼字の四義が説かれてい

る。また、『秘藏記』にも、

吽字は **ཀྲ་ཀྲ་ཀྲ་** の四字をもって成就せり。阿字は字跡なけれども訶の音の中に在り。阿字は一切諸法本生の義なり。訶字は一切諸法因縁所生の義なり。また浄菩提心なり。塙字は空の義、また損滅の義なり。摩字は有の義、また増益の義なり。⁽¹⁰⁾と四義が示されているのである。

第一に訶字の義であるが、『吽字義』に、

一に賀字の義とは、中央本尊の体、これその字なり。いわゆる、賀字はこれ因の義なり。梵には係怛嚩二合という。すなわちこれ因縁の義なり。因に六種あり。および因縁の義の中に因に五種あり。阿毘曇に広く説くがごとし。もし訶字門を見れば、すなわち一切の諸法は因縁より生ぜざることなしと知る。これを訶字の字相となす。⁽¹¹⁾

とあり、訶字は吽字の主体になっている字ということである。この訶字は hetu あるいは『大日経疏⁽¹²⁾』からの引用である係怛嚩 hetva の頭文字の h 字をとったものであらう。hetu または hetva とも因あるいは因縁の意味をもっている語であるから『吽字義』にある「すなわちこれ因縁の義なり。」ということになる。この因縁の義を解釈すると、因にはあらゆる原因を六種に分類した能作因・俱有因・同類因・相応因・遍行因・異熟因の六因⁽¹³⁾があり、また、四縁(増上縁・等無間縁・所縁縁・因縁)の中の因縁には、前の六因の中から能作因を除いた五種の因がある。このことは阿毘達磨論書に説明されているのである。もしこの訶字門を見れば、すべてのものが因縁より生じているこ

とが知られる。これを詞字の字相となすのである。

詞字の字相は、因縁のことについて論じられ、およそあらゆるものは、一つとして独立自存し、常住不変なものはなく、すべてのものが原因や条件（因と縁）によって成立し、絶えず変化しているものである。

このように考えると、因縁あるいは縁起は、現象世界の法則として、また、人間世界においてのおたがいの人間関係をよくすることを考えるべきであろう。そこで、空海の『秘藏宝鑰⁽¹⁶⁾』巻下に、「密厳国土」という言葉がある。これは住みよい社会、明るい社会をつくること、いいかえれば幸福な生活、平和な社会の建設という理想をかかげているものではなからうか。

(二) 阿字の字相

第二に阿字の思想は、単に密教経典だけでなく、広く諸経典に説かれるところである。この阿字は、一切の文字、一切の音声、一切の実相の源とするとともに、また阿字が接頭語である場合には、否定の意味につかわれるなど、教義解説の譬喩、象徴として用いられている。

この阿字を密教では、『大日経疏』巻七に、

阿字は是れ一切法教の本なり、凡そ最初に口を開く音にみな阿の声あり。若し阿の声を離るれば、則ち一切の言説なし、故に衆生の母とす。凡そ三界の語言はみな名に依る、名は字に依れり、故に悉曇の阿字を衆字の母とす。當に知るべし、阿字門真実の義も亦復是の

如し、一切法義の中に遍せりと。所以は何んとならば、一切の法は衆縁より生ぜざることなきを以て、縁より生ずるものは悉くみな始あり本あり。今此の能生の縁を観るに、亦また衆因縁より生ず、展転して縁に従う、誰れをかその本とせん。是の如く觀察する時は、則ち本不生際を知る。是れ万法の本なり。なお一切の語言を聞く時、即ち是れ阿の声を聞くが如く、一切の法の生を見る時、即ち是れ本不生際を見る。若し本不生際を見る者は、即ち是れ実の如く自心を知る。実の如く自心を知るは即ち是れ一切智智なり。故に毗盧遮那⁽¹⁷⁾は唯だ比の一字を以て真言としたもう。

と示され、一つの阿字が、万法に遍満している旨を明らかにしたものである。また、同じように、『大日経疏』巻十二には、

阿字は是れ開口の声なり、若し阿の声なければ即ち口を開くこと能わず、口若し開かざれば一切の字皆なし、是の故に阿字は一切字の種子と為す⁽¹⁸⁾。

とあり、およそ口を開けば最初に出る声は、阿の声であるから本初の声といわれ、あらゆる音声の発する根本であるから衆生の母ともよばれる。いづれにしても阿字の音は音声世界の源である。また、『大日経疏』巻六には、

此の阿字門は一切真言の王たること、なお世尊の諸法の王たるが如し⁽¹⁹⁾。

と示され、阿字を一切真言王と説かれている。また、『大日経』巻二には、

是の中の一切の真言の心は、汝当に諦に聴くべし。所謂阿字門なり。此の一切真言の心を念ずるを最無上と為す。是れ一切の真言の住する所なり。此の真言に於て而も決定を得べし。⁽²⁰⁾

と示され、阿字を一切真言心といい、これを念すると最無上と説かれているのである。これらのことを参考にすると、阿字は密教の教相上、あるいは事相上重要な文字を示しているのである。

そこで阿字の字相について、『卍字義』には、阿字の義とは、訶字の中に阿の声あり、すなわちこれ一切字の母、一切声の体、一切実相の源なり。およそ最初開口の音はみな阿の声あり。もし阿の声を離るれば、すなわち一切の言説なし。故に衆声の母となす。もし阿字を見れば、すなわち諸法の空無を知る。これを阿字の字相となす。⁽²¹⁾

と説かれている。阿字はサンスクリット語の最初の母音であり、カ行以下の行は、すべからく子音に阿(अ)をつけて発音する。したがって、訶字の中にも阿の声もある。この阿字はすべての文字の母であり、すべての声の体であり、すべての実相の源である。このことは『大日經疏』⁽²²⁾にも説かれているように、阿字は一切諸法を示し、一切の言説は阿字から生じ、阿字をはなれて一切の言説はない。したがって、阿字を見れば、一切諸法は空無ということを知るのである。

また阿字の字相には、無・不・非などの否定をあらわす文字があり、この字により諸法の空無を知らなければならない。『卍字義』合釈の段に、

もし非空・非有・非常・非斷・非一・非異等と執するは、阿字の中の非の義の中に撰す。もし不生・不滅・不増・不減等の八不等と執するは、また阿字の中の不の義の中に撰す。またもし無色・無形・無言・無説等と執するは、また阿字の中の無の義の中に撰す。⁽²³⁾

とある。この無・不・非の三義は、諸法実有に對する否定する言葉であるけれども、否定するゆえんは、空理をあらわさんがためであり、空理をあらわすゆえんは、妙有の体をあらわさんがためである。この妙有の体は、字義である有・空・不生の三義にゆだねなければならない。

(三) 汗字の字相

第三に汗字は、𑖦𑖳𑖫の頭文字の𑖦字をとったもので、損減の意味をもっている。『卍字義』に、

三に汗字とは、これ一切諸法損減の義なり。もし汗字を見れば、すなわち一切の法の無常・空・苦・無我等を知る。これすなわち損減にして、すなわちこれ字相なり。⁽²⁴⁾

とある。この汗字の法門を字相の方面から解釈すると、一切諸法の損減の義をあらわしている。もし汗字を見れば、一切法は無常・空・苦・無我のことを知るのである。これが損減の義で汗字の字相とするのである。

この汗字の字相釈文は、字義を説明する中の「苦・空・無常・無我の故に、四相遷變の故に、不得自在の故に、不住自性の故に、因縁所生の故に、相觀待の故に」という損減の六義があり、その中の初義だ

けをとりあげて、字相の解釈をしたものであらう。『瑜伽金剛頂經積字母品』に、

汗引字門とは一切法損減不可得の故なり。⁽²⁶⁾

とあり、また、『般若理趣經』卷上に、

汗の声とは、一切法損減不可得なり。⁽²⁷⁾

とあり、双方とも不可得の言葉を加えることにより、字義積をあらわすことになる。

(四) 麼字の字相

第四に麼字は、mamaの頭文字のm字をとったもので、吾我を意味している。また『吽字義』に、「梵には怛麼という。これに翻じて我となす。」⁽²⁸⁾と示し、怛麼という文字は、āmanを指すように思われ、それは実体としての自我を意味している。

そこで麼字の義について、『吽字義』には、

四に麼字の義とは、梵には怛麼という。これに翻じて我となす。我に二種あり。一には人我、二には法我なり。もし麼字門を見ればすなわち一切の諸法に、我・人・衆生等ありと知る。これを増益と名づく。これすなわち字相なり。⁽²⁹⁾

とあり、麼字の字相は自我をあらわしている。その我に二種があつて、一つには実体我、二つには法に実体があるとする法執である。もしこの麼字門を見れば、一切諸法に我・人・衆生などがあることを知る。これを第三汗字における損減に対し、増益と名づけている。『般若理

趣經』卷上に、

即ち謂く麼字とは、一切法我の義不可得なり。我に二種あり。所謂人我と法我となり。此の二種は皆是れ妄情の所執なれば名づけて増益の辺と為す。若し損減と増益とを離るれば中道に契うなり。⁽³⁰⁾とあり、増益の義が説かれているのである。

結語

吽の一字は、訶・阿・汗・麼の四字によって合成された文字で、その一字一字の字相が解釈されていたが、この字相段の最後に、一切の世間のものは、ただ表面的な字相のみを知って、いまだ深秘なる字義をときあかさない。したがって、生死にとらわれる人となるのである。しかし、これに反し、如来はすべての実義を知っているので、大覚と名づけられているのである。

このように凡夫の課題として、深秘なる世界を知るためには、宗教的自覚にめざめなければならぬ。『吽字義』の中に、

いわゆる甚深秘藏とは衆生自らこれを秘するのみ。仏に隠あるにはあらずと。これすなわち阿字の実義なり。⁽³²⁾

と示され、『大日經疏』⁽³³⁾を引用しながら説かれている。以上、吽字の字相を略述したわけであるが、字義を理解しないかぎり、前述の如くなる。後日あらためて、吽字の字相を再考するとともに字義を講究するつもりである。

註

- (1) 梅尾祥雲著『現代語の三部書と解説』下。宮坂宥勝・梅原猛共著『生命の海(空海)』(仏教の思想九卷、一五二—一五八頁)。伊藤淨嚴「吽字義の思想」(『密教学研究』第六号、一〇七—一二三頁)等を参考にさせていただいた。また拙稿「阿字の形音義について」(『宗教研究』第一九四号)、「密教における不生の意義」(『印度学仏教学研究』一七卷一号)、「阿字の字相について」(『宗教研究』第二一八号)等参照。

- (2) たとえば『秘藏記』(弘法大師全集第二輯、四六—四七頁、以下弘全という。)に、

毗盧遮那經には阿字を毗盧遮那の種子となし、吽字を金剛薩埵の種子となす。金剛頂經には吽字を毗盧遮那の種子となし、阿字を金剛薩埵の種子となす。金剛界の儀軌かくのごとし。会毎にこの二字相代れり。まさに知るべしこれ互に主伴となるの義なり。

と説かれている。

- (3) 御請来目錄 (弘全第一輯、九一頁)
 (4) 声字実相義 (弘全第一輯、五二六頁)
 (5) 般若心經秘鍵 (弘全第一輯、五六一頁)
 (6) 梵網經開題 (弘全第一輯、八二二頁)
 (7) 空海は『金剛頂』系の経軌を『金剛頂』あるいは『金剛頂經』と称していることが多い。この場合は『般若理趣釈』、詳しくは『大乗金剛不空真実三昧耶經般若波羅蜜多理趣釈』をさしている。以下『般若理趣釈』という。

- (8) 吽字義 (弘全第一輯、五三五頁)

- (9) 般若理趣釈卷上 (大正蔵一九・六〇九、下)に、
 吽字とは因の義なり。因の義とは謂く菩提心を因と為す。即ち一切如

來の菩提心なり。亦是れ一切如来不共真如の妙体なり。恒沙の功德皆此れより生ず。此の一字に四字の義を具す。且く賀字を以て本体と為す。賀字は阿字より生ず。阿字一切法本不生によるが故に、一切法因不可得なり。其の字の中に汗の声あり。汗の声とは、一切法損減不可得なり。其の字の頭上に円點と半月とあり、即ち謂く慶字なり。慶字とは、一切法の義不可得なり。我に二種あり。所謂人我と法我となり。此の二種は皆是れ妄情の所執なれば名づけて増益の辺と為す。若し損減と増益とを離るれば即ち中道に契うなり。

という文による。

- (10) 秘藏記 (弘全第二輯、一八一—一九頁)
 (11) 吽字義 (弘全第一輯、五三五頁)
 (12) 大日經疏卷七 (大正蔵三九、六五六、上)
 (13) 吽字義 (弘全第一輯、五三五頁)
 (14) 阿毘達磨俱舍論卷六 (大正蔵二九、三〇、上)に、
 何の法を説きて因縁と為すや。且らく、因に六種あり。何等を六と為すや。頌にいわく、能作と及び俱有と、同類と相応と遍行と並びに異熟となり。因に唯、六種のみありと許す。
 とあり、以下六因の説明がなされている。また、隆源述『吽字義釈勸注抄』卷上、『真言宗全書』一五卷一三頁上、以下)にも六因の解釈がされている。
 (15) 阿毘達磨俱舍論卷七、(大正蔵二九、三六、中)に、
 六因の中に於て、能作因を除いて所余の五因は是れ因縁の性なり。
 と示されている。
 (16) 秘藏宝鑰卷下 (弘全第一輯、四七一頁)
 (17) 大日經疏卷七 (大正蔵三九、六五一、下)

- (18) 大日經疏卷十二 (大正藏三九、七〇九、下—七一〇、上)
- (19) 大日經疏卷六 (大正藏三九、六四二、下—六四三、上)
- (20) 大日經卷二 (大正藏一八、一七、中)
- (21) 吽字義 (弘全第一輯、五三五頁)
- (22) 大日經疏卷七 (大正藏三九、六五一、下)
- (23) 吽字義 (弘全第一輯、五四九頁)
- (24) 吽字義 (弘全第一輯、五三五—五三六頁)
- (25) 吽字義 (弘全第一輯、五四〇頁)
- (26) 瑜伽金剛頂經積字母品 (大正藏一八、三三八、中)
- (27) 般若理趣積卷上 (大正藏一九、六〇九、下)
- (28) 吽字義 (弘全第一輯、五三六頁)
- (29) 吽字義 (弘全第一輯、五三六頁)
- (30) 般若理趣積卷上 (大正藏一九、六〇九、下)
- (31) 吽字義 (弘全第一輯、五三六頁)
- (32) 吽字義 (弘全第一輯、五三八頁)
- (33) 大日經疏卷七 (大正藏三九、六五一、下)

(本学助教授・日本思想)